

平成 30 年 4 月 26 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03882

研究課題名(和文) 1950年代の米国による映画広報政策と日本の防衛広報の結節点についての実証的研究

研究課題名(英文) The substantial study on the nodal points between the public diplomacy policy by using movies by the US in the 1950's and Japan's defense public relations

研究代表者

谷川 建司 (Tanikawa, Takeshi)

早稲田大学・政治経済学術院・客員教授

研究者番号：10361289

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1950年代に製作・公開された何本かの日本映画が、米国(米軍)と日本(警察予備隊及びその後継組織)による二重のプロパガンダ映画であったことを、米国立公文書館所蔵の米国広報文化交流庁(USIA)文書の調査、及びそこで入手した米国側資料と照らし合わせるべき日本側資料についての調査によって明らかにした。

成果物としては、USIA文書の中に含まれていた、イェール大学のProfessor マーク・T・メイ教授による『USIS日本報告書』(1959年6～7月)を全訳し、それに本研究の研究代表者・谷川建司と、研究分担者・須藤遙子による解説、論考を付した形での書籍を刊行する予定で準備を進めている。

研究成果の概要(英文)： In this research, it was shown that several Japanese movies produced and released in the 1950's were dual propaganda movies by the US (US military) and Japan (National Police Reserve and its successor), through the research on the USIA documents in the collection at NARA (National Archives and Records Administration), and the Japanese side materials to be compared with the US side materials.

For the outcome of the research project, we translated the entire Report on USIS = JAPAN, June - July, 1959 by Professor Mark T. May of Yale University which was included in the USIA Documents and will publish a book with commentary and discussion by and both study representative Takeshi Tanikawa of this study, and study partaker Noriko Sudo,

研究分野：映画史

キーワード：映画政策 パブリック・ディプロマシー USIA 文化外交 プロパガンダ

#### 1. 研究開始当初の背景

過去に米国立公文書館での一次資料を用いた占領期のGHQによる対日映画政策を研究してきた谷川建司(研究代表者)と自衛隊による映画協力の事例を研究してきた須藤遙子(研究分担者)との共同研究によって、戦後日本の軍事組織が米国の関与の下で行なってきた映画広報政策(パブリック・ディプロマシー)を詳細に解明することを目的として共同研究がスタートした。

#### 2. 研究の目的

本研究は、1950年代に製作・公開された何本かの日本映画が、米国(米軍)と日本(警察予備隊及びその後継組織)による二重のプロパガンダ映画であったのではないかと仮定し、その事実を米国立公文書館所蔵の第一次資料と日本側資料についての調査によって明らかにすることであった。

#### 3. 研究の方法

初年度(平成27年度)、第二年度(平成28年度)に米国立公文書館(NARA = National Archives and Records Administration)、同ニューヨーク分室などで必要な文書を調査し、第三年度(平成29年度)いっぱいまでに国立近代美術館フィルムセンター(現・国立映画アーカイブ)、松竹大谷図書館、公益財団法人川喜多映画文化財団、国際日本文化研究センター等にて調査を進め、米国側資料と照らし合わせるべき日本側資料についての調査を終えた。

#### 4. 研究成果

具体的には、イェール大学のマーク・T・メイ教授(Prof. Mark T. May)によるUSIAの日本での活動についての調査報告書(Report on USIS = JAPAN, June - July, 1959)が最も重要な文書であるとの結論に至り、これを本研究の研究代表者・谷川建司と、研究分担者・須藤遙子とで分担して全訳し、それに谷川・須藤それぞれによる解説、論考を付した形での書籍を刊行する予定で準備を進めている。出版社は大月書店、刊行時期は2018年8月と確定しているが、本のタイトルはまだ確定しておらず(仮題は『対米追従の起源と米国の対日文化外交政策』、ISBNも未定である。

また、マーク・T・メイ教授調査報告書とは別に、「精査報告」としてその一部(映画に関する記述部分)の翻訳を試みたInspection Report, May 20, 1961の中で、日本の商業映画への製作資金拠出によるUSIA(USIS)の世論操作の試みとして挙げられていた事例に関して、日本の映画会社側の資料や『映画年鑑』や『キネマ旬報』など当時の言説を参照しつつ、その実態についての詳細を明らかにし、またその評価を行なった。

USIAが具体的に支援した日本の商業映画作品としては「精査報告」では『鉄の花束』、

『嵐の青春』、『怒涛の兄弟』、『ジェット機出動 第101航空基地』、『殺されるのは御免だ』の五本を挙げている。これらのうち『ジェット機出動 第101航空基地』を除く四本についてはいずれもそのテーマを大きく捉えるならば「理想の社会実現を掲げる共産主義の実態は暴力的手段に拠る支配と搾取に他ならない」という反共産主義的立場を宣伝するもので、『ジェット機出動 第101航空基地』だけは「全ての自由国家は自衛しなければならない」という日本の再軍備への支持というテーマである。

一本目に挙げられている『鉄の花束』は、社団法人日本映画連合会による『日本劇映画作品目録』に拠れば中田プロ製作、北星映画配給、そして1953年8月6日に“完成”したことは判るが、1953年以降の『映画年鑑』の年度別公開作品一覧や北星映画の配給作品一覧などにはなぜか載っておらず、実際に“公開”されたのかどうかは確認出来ない。但し、国立近代美術館フィルムセンターには映倫審査用のシナリオとプリントが残っているため、内容について確認することが出来る。製作・脚本・監督は中田春久である。

内容はある造船所が舞台で、労使協約によって大変にうまくいっている職場環境の中、会社側が当初計画に無かった新たな造船の発注を受けるかどうかを先ず組合に諮ることにしたところから物語が始まる。組合の代議員会の席で「特別賃金を出してもらおうべきだ」という意見と、「それでは労使協約を自ら破ってしまうことになるから通常賃金で」という意見が対立したため、全部門で職場集会を実施して意見を集約した結果、労働者側は新たな造船という会社側の提案を受け入れることとなった。主任技師には労使協約尊重を訴えていた内山(湖城龍太郎)が就くことになったが、これは内山に積極的に恋のアプローチをしている取引先の社長令嬢節子(宗像規子)が裏で働きかけていた結果だった。一方、組合幹部の一人金山(高島敏郎)と社長秘書の柴田(楠田薫)は共産党の組織から送り込まれていた破壊活動分子で、組合を扇動して会社側と対立させ、造船を阻止するという本部の指令を受けて工作を開始する。内山の秘書をしている紀子(夢まさ子)の兄・渉(近藤宏)は同僚を通じて金山の仲間に引き入れられ、彼らは事故を多発させるサボタージュから、「資本家の犬 内山を葬れ」といったビラ貼り、そして遂には事故に見せかけて内山を殺害しようとする。だが、その鉄板落下事故に紀子が巻き込まれるに及び、渉は組織の悪事を全て暴露し、金山と柴田は組織から計画失敗を糾弾されて殺害される。……といったストーリーが展開される。

最大の疑問は、組合の内部に潜む破壊活動分子らが自分たちの主張の為には不法な手段も辞さないものとして描かれているこの反共産主義的立場の作品が、なぜ北星映画と

いうソヴィエトとのパイプを持つ最も左翼的な配給会社に拠って配給された（配給される予定であった）のか、という点である。一つの仮説として、本作品が“GHQの要請を受けて作られる民主的な組合活動を指導する映画”ということで北星が配給を引き受けるつもりでいたところ、実際の内容はむしろ“組合活動をネガティブに描く映画”であることが判明したため北星は手を引き、結果的には一般公開はなされず、USIS映画と同様の非劇場上映のみとなった、ということである。

二本目の作品『嵐の青春』は、中井プロ製作、新東宝配給によって1954年6月1日に公開された作品で、監督は志村敏夫、脚本は沢村勉である。本作品は新東宝の権利を継承した国際放映株式会社にもフィルムセンターにもプリントが現存せず、また過去にソフト化もテレビ放映もなされていないため、今日では鑑賞する機会を持つ事は出来ないが、プレスシートが現存しているのと、フィルムセンターに映倫審査用の脚本が残されているため、ほぼ正確な内容を掴むことが出来る。主人公の佐藤（沼田曜一）は帝都大学の工科に籍を置く苦学生で、新聞社の配送係の徹夜のバイトゆえに授業中についつい居眠りする状態だったが、工学部の機関紙「黎明」編集員の関屋（片山明彦）から日雇い労働者の簡易宿泊所管理人の高額稼げるバイトを紹介してもらい喜んで引き受ける。佐藤が思いを寄せる志村幸子（遠山幸子）は教授の娘でブルジョワ階級だったが、幸子もひたむきに生きる佐藤を好いていた。収入の為に夜のバイトを始めようとしていた佐藤の妹智子（西条鮎子）を見かねた幸子は、自分に思いを寄せる野球部の花形選手千葉（舟橋元）を通じて彼の父親の経営する金属会社の事務の仕事を紹介するが、千葉の父は佐藤が働いている機関紙が赤の雑誌だと指摘し、政治活動をする者の身内を雇う訳にはいかないと拒絶する。実際、佐藤は次第に過激な政治活動グループに引き入れられ、第23回メーデーに参加して警官たちと衝突する。このメーデーの騒ぎの中で佐藤の下宿先の家主である巡査が死亡し、公安にマークされるようになった佐藤は、遂には組織から派出所襲撃指令や代議士暗殺指令を受けるも拒否したため、裏切り者として監禁され粛清されそうになる。……といった内容である。恋敵であった千葉は佐藤の妹を野球部の雑用係として受け入れ、かつ最後には佐藤自身を助けるのだが、ブルジョワ階級である千葉親子と佐藤との会話部分というのが、この作品の作り手である志村敏夫監督や脚本の沢村勉、ひいては製作資金を援助したUSIA側の基本的なスタンスを示している。

破壊活動防止法（破防法）は、時の第三次吉田茂内閣第三次改造内閣によって1952年4月に提出され、その直後の5月の第23回メーデーでの騒乱事件（「血のメーデー事件」）

を受けて、同年7月に施行された法律だが、その記憶もまだ色濃く残る二年後の1954年公開のこの作品での言及は、非常に時宜に叶ったものであり、貧乏ながら一緒に懸命に生きようとしていた主人公が共産主義思想に傾倒していかうとするのを、良識のある、そしてフェアな精神を持つ（自分も惚れていた女性との恋敵であっても、その妹や本人を苦境から救ってやろうとする）穏健な若者たちが何とか食い止めようとする、というメッセージ性の強い作品であったと位置づけることが出来る。

三本目の作品として挙げられている『怒涛の兄弟』は、「精査報告」では1955年の作品と記されているが、実際には1957年6月5日公開で、製作は新東宝、監督は『嵐の青春』と同じく志村敏夫である。脚本は猪俣勝人と鈴木岬一の二人がクレジットされている。内容としては、母・厚子（花岡菊子）と二人の息子、兄・高志（中山昭二）と弟・文彦（松本朝夫）の明るく幸福な家庭が崩壊する悲劇を描いているのだが、高志が公安調査庁に勤務しているのに対して、まだ学生の文彦は世の中の矛盾に対する憤りから社会を変革させるという共産主義思想に染まっている。初めは人民から搾取するブルジョワ階級を寓話化した紙芝居を労働者階級の子供たちに見せるアルバイトをしていたのだが、やがて同じ思想に人生を賭ける同志谷崎みどり（前田通子）の口利きで貿易会社の見習いとして港湾労働者になる。ところが、この貿易商社というのが実は革命の為に資金を稼ぐ目的で麻薬の密貿易をしていたことが判り、しかも社長の岩田（菊地又三郎）は売り上げの一部10万円を使い込み、その罪を文彦に被せて自らは香港へ高飛びしようとして画策、紙芝居屋の元締めで実は組織幹部の工藤（九重京司）に相談した文彦は「告発者の使命は裏切り者を抹殺する事だ」と拳銃を渡され、組織の鉄の規律の恐ろしさを知る。みどりの報せで港へ駆けつけた兄高志と母厚子だが、文彦は岩田を射殺して逮捕され、裁判では無罪を主張する組織側の弁護士の忠告を無視して射殺したことを認め、母厚子もまた真実を話して罪を償ってほしいと考えて息子の殺人を証言した。結局のところ、真っ直ぐな気性の若者だった主人公が共産主義思想に染まったところ、実はその組織は不正と墮落に塗れたものであり、前途有望だった若者の運命を悲劇に追いやるものでしかなかった、という明確なメッセージを伝える目的の作品だという事が出来る。

四本目として挙げられている『ジェット機出動 第101航空基地』（1957年12月15日公開）は、東映東京撮影所製作で、監督は小林恒夫、脚本は森田新が執筆している。本作の担当プロデューサーであった根津昇と脚本を担当した森田新の証言に拠れば、東映に話を持ち込んでUSISとの間を取り持ったのは『嵐の青春』を製作した中井プロの代表、

中井金兵衛だったという。この辺りは、やはり USIS の支援する作品を決めるやり方というのが、自分たちと考え方の近い特定の人物を一本釣りして、その人物をある種のエージェントとして使うような形で行われた証とみるべきであろう。

また、「精査報告」の中では触れられていないのだが、『ジェット機出動 第 101 航空基地』と同様の立場(日本の空を護るために、あるいは人命救助など緊急を要する状況への対処という観点で航空自衛隊は必要である、とする立場)に基づく作品というのは、そのほかにも実は当時沢山製作されている。たとえば、同じ東映の教育映画として製作された『愛のジェット機』という作品、あるいは大映製作による劇映画『暁の翼』(1960 年 4 月 6 日公開)といった作品が挙げられる。これまでの調査では残念ながらそれらの作品に対して USIA なり米軍が直接・間接の形で制作費を支援した証拠などは発見できていないものの、現にそういった支援を受けた作品があるという事実は日本の映画関係者の間で噂なりの形で伝わっていたであろうことは想像され、結果的にアメリカが喜ぶような内容の映画を作っていればなにかの見返りがあるかもしれない、というようなメンタリティの形成につながって行った可能性もまた否定はできないのではないかと考えられる。

五本目の作品として挙げられている『殺されるのは御免だ』は、さくらプロ製作、新東宝配給によって 1960 年 4 月 23 日に公開された作品である。独立プロ系で修業を積んだ原功の第一回監督作品で、脚本は田辺虎男と阿部計である。『怒涛の兄弟』に次いで松本朝夫や三ツ矢歌子が出演している以外、他の USIA 支援作品のスタッフ等と人的な繋がりがあつたかどうかは確認できない(少なくともクレジット上では繋がりはない)が、独立のプロダクションが製作して新東宝が配給したという点では『鉄の花束』や『嵐の青春』と同じ流れということになる。

内容は、アルバイトで食いつないでいる若者・宇津見(梅若正二)が、高級車に乗った謎の女あけみ(左京路子)からの伝言を受けて、アルバイト仲間の菊池(橋爪秀雄)のアパートを訪ねたところ菊池は胸を刺されて死んでおり、犯人と間違えられた宇津見はその場から逃亡し、もう一人のアルバイト仲間だった小倉(杉山弘太郎)の家を訪ねる。数日前に彼ら六人がアルバイトとして雇われたのは深夜に東京湾に陸揚げされた荷物を運搬する仕事で、どうやら麻薬密輸の片棒を担がされたらしい。別のアルバイト仲間の学生花村(堀勝之祐)もスキーに行つて遭難死したという記事が新聞に出ており、あの夜のアルバイトたちが口封じのために殺されているのに違いなかった。宇津見のために昼食を注文しに表の通りに出た小倉もまた謎の車に轢かれて死んだ。恋人早苗(三ツ矢歌子)

の家に匿われた宇津見はアルバイト先の運送会社や運転手を務めていたほかのアルバイト仲間二人を訪ねて事件の黒幕を突き止め、自身の身の潔白を証明しようとする。一方、早苗の父勘次(殿山泰司)が勤める町工場はスト決行中だったが、そこへある組織の男平川(松本朝夫)が訪ねてきて組合支援のため現金を支給する。その組織とは香港に極東本部を置く第十八機関というもので、貿易会社を隠れ蓑に麻薬を密輸して莫大な利益を上げ、それを共産主義革命支援の為に用いていたのである。映画は、拉致された早苗を救い出そうと敵のアジトに乗り込んだ宇津見もまた監禁されてしまうが、組織の機関長 F 氏(ベルナルド・バーレ)の暗殺指令に反して宇津見を助けようとしたあけみが F 氏に撃たれ、直後にパトカーが駆け付けて事件が解決すると事が示唆されて終わるのだが、全体としてスタイリッシュな映像を見せることばかりに腐心してストーリーを語る事がおろそかになっている印象が強く、あけみが宇津見を助ける動機(おそらくは宇津見に惚れたという事と推察できるが)が不明確だし、スト決行中の組合に資金を提供したのが第十八機関らしいという肝心のプロットが曖昧にしか描かれておらず、観た人によっては町工場のストのエピソードと麻薬密輸組織との関係が判らないかもしれないという印象を受ける。

『ジェット機出動 第 101 航空基地』を除く四本の「反共産主義」のテーマを扱った作品に共通してみられる特徴は、以下に挙げるような明確なメッセージを含んでいるという事である。即ち、「共産主義思想が、矛盾に満ちた現代社会を理想の社会に変えると信じ込んでいる者がいるが、実際には彼らはそのためには暴力的な手段も辞さず脱落者を肅正するような恐ろしい組織にほかならず、その活動資金は麻薬密売のような不法かつ非人道的な行為によって得ているのである」という事である。また、USIA との人的な接点という面では、短編映画製作会社として CIE / USIS 映画の仕事を受注していた小さな会社が長編劇映画に進出し、新東宝などを通じて配給するという形で実現したであろうケースがほとんどではないかと思われる。そして、USIA 側としては CIE / USIS 映画の仕事(日本の短編映画製作会社が製作した作品を買い上げて CIE / USIS 映画に組み入れることもあつたし、アメリカで製作された作品の日本語版制作を依頼する場合もあつた)を通じて知り合っていたそうした日本の短編映画製作会社のうち、たとえば『嵐の青春』を製作した中井プロの代表、中井金兵衛のように、自分たち自身と考え方の近い特定の人物を一本釣りする形でアプローチしたことではなかったろうか。もちろん、コミットの度合いというのは「精査報告」に述べられている通り「主題上の開発のみの場合から製作全体を通じての細目に亘る承認への権

限に至るまで及んでいる」とまちまちであったのだろう。

特になし。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

「4. 研究成果」に記した通り、成果物としては図書を刊行予定であるが、現時点ではまだ刊行されておらず(計 0件)としている。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等  
特になし。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷川建司 (TANIKAWA, Takeshi)  
早稲田大学政治経済学術院・客員教授  
研究者番号：10361289

(2) 研究分担者

須藤遙子 (SUDO, Noriko)  
筑紫女学園大学原題社会学部・准教授  
研究者番号：60439552

(3) 連携研究者

特になし。  
研究者番号：

(4) 研究協力者